

「三宝通信」法話

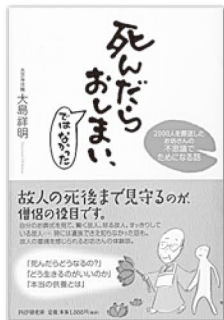
浄土宗 天上山大念寺
住職 大島祥明



故人の死後まで見守るのが、僧侶の役目です。

『死んだらおしまいではなかった』

出版数十一万四千部！



自分のお葬式を見て、驚く故人、怒る故人、すつきりしている故人・・・時には遺族でさえ知らなかった話も。

故人の靈魂を感じられる大念寺、大島祥明住職の体験談。

私たちが死ぬということは、この身体と「本人」(俗に魂ともいう)とが分かれる状態をいう。

通夜、葬儀になれば、祭壇が設けられて多くの縁者が集まってくる。僧侶が招かれて読経が始まる。これらの様子を「本人」はそばでじっと見ている。

「本人」にはすべて聞こえているし、見えている。

「本人」はじっと見ているが、自分自身が死んだということに気づいていない場合がある。だから、「自分は死んだ」ということに気づかせる必要がある。

自分の死に気がつかないと長期間にわたってこの世にとどまりつづけることもある。

お通夜、お葬式、年忌法要などの儀式は、「本人」に「あなたは亡くなった」ということを、繰り返し繰り返し教えるためにある。

僧侶にお経を読んでもらうこと、立派な戒名やお墓をたてるのが供養のすべてではない。

ほんとうの供養とは、故人がこの世にやり残したこと、未練が残っていることを、遺族ができるだけすみやかに取り除いて安心させてあげるところにある。

故人のことを思い出すときに、故人もこちらのことを思っている。故人を思い出すときに、故人はともにいる。〈思い出す・偲ぶ〉ということが故人に對す

私の体験を発表すべきかどうか、三十年近く思案していました。

「成仏するでしょうか？」という遺族の質問から始まったこの遠大な企画と収集された膨大な資料——これらの分析はまだまだ時間がかかると思いますが、とりあえずポイントだけを発表させていただくことにしました。

人は死んでも変わらない、生きていたときと同じです。優しい人は死んでも優しいし、面倒見のよかった人は死んでも面倒見がよい。ガンコな人は死んでもガンコです。

そして、死んで終わりではありません。

死後も故人はそばにいて、私たちのことを見ているし、喋っていることも聞いています。

故人のほうからも私たちに語りかけているのでしようが、体がなくなっているのに、音(声)にはならないのです。

出版するにあたり、私が直接、葬送させていたいた二千四百六十六名の方々、大念寺で葬送した約八千名の方々、さらにお手伝いいただいた他の寺院の僧侶に葬送された約二万名の方々のご冥福をお祈りし、ご協力をいただいたことを心から感謝いたします。(大島祥明) へ

るもつとも大切な供養になる。

故人を思い、そのうえで、心の中で「どうぞ成仏してください」「どうぞ安らかに浄土に往生してください」と念ずる。その心は必ず故人に通じる。

大切なのは、「心からの祈り」であって決して形ではない。

故人に對して「こうしてあげれば喜んでもらえるんじゃないか、こうしたら安心してもらえんじゃないか」ということなど、できることをひとつでも実行することが供養になる。

故人のやり残したことがあれば、代わりにしてあげる、またなにかお供えするにしても、故人が生前好きだったものを供えてあげる。

「安心していただこう」「喜んでいただこう」という心からの気持ちで、なにか気がついたら、ひとつでもいいから実行しつづけていくことが、故人の供養につながる。

■大島祥明著『死んだらおしまい、ではなかった』より引用。

▽問い合わせ ☎03-3239-6221 (PHP研究所書籍第一部)